

## キューサインと学習言語の獲得

企画者	脇中起余子（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター）
司会者	長南 浩人（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター）
話題提供者	長南 浩人（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター） 福島 邦博（埼玉医科大学 耳鼻咽喉科） 脇中起余子（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター）
指定討論者	松本 末男（元筑波大学、聴覚障害者教育福祉協会） 原島 恒夫（筑波大学人間系）

KEY WORDS: 聴覚障害教育、キューサイン、学習言語

### 【企画趣旨】

日本語の音韻体系を視覚的に表す「キューサイン（キュードスピーチ・キュー）」について、キューサインと指文字を同一視してキューサインの使用を取りやめる聾学校が続出しており、2018年現在の日本の聴覚特別支援学校においてキューサインを継続して用いる学校は約16%となっている（脇中・原島・長南、2020）。

人工内耳や補聴器の装用により日常会話は聴覚活用で問題なくできるように見える聴覚障害児が増えた現在も、小学校高学年以降の教科学習や微妙な日本語表現の獲得が難しい例がみられる。そこで、本シンポジウムでは、「学習言語」に焦点をあて、キューサインが書記日本語、特に学習言語の確実な獲得にどのように寄与できるかの検討につなげたい。（脇中起余子）

### 【話題提供者の趣旨】

#### 話題提供 1 「学習言語とは」

聴覚障害児教育では、予め「生活言語」と「学習言語」を主として場面依存度の違いで区別し、生活場面における話し言葉の充実が前者を発達させ、生活言語の力が学習言語を下支えするとして両者を階層的に捉えてきた。この考え方は教育現場に大きな示唆を与え、聴覚障害児の言葉や認知の発達の道筋に即した指導が行われた。一方、「生活言語」とは幼児期に獲得する言葉であり、「学習言語」は就学後に教科指導を通して学ぶものである、また「生活言語」とは話し言葉を指し、「学習言語」とは書き言葉の意味するものである、さらには「学習言語」とは教科学習における専門用語のこののみを指すなど多く誤解も生まれた。

そこで、シンポジウムの初めに「生活言語」と「学習言語」の定義を再確認し、キューサイン使用と学習言語獲得との関係を検討するための理論的枠組みを提供する。（長南 浩人）

#### 話題提供 2 「人工内耳と DLI」

人工内耳装用児の多くは聴覚を活用して音声情報から順調な言語発達がもたらされる場合が多い。しかし、一部の児童では、人工内耳を装用して聴取閾値が改善したにもかかわらず知的発達に不釣り合いな程言語発達が遅れる場合がある。Hawker らは、こうした例を特異的言語発達障害 (SLI) の病態となぞらえて、DLI (disproportionate language impairment) として報告している。こうした DLI 例の場合、自験例ではしばしば音韻認識の困難さを伴う場合がみられ、また音韻認識の発達に配慮した指導を行うことによって言語発達が順調に推移する場合がある。こうした事例の指導にキューサインの導入が有用であることがあるため、DLI の概念と臨床像について紹介する。（福島 邦博）

#### 話題提供 3 「学習言語の伝達とキューサイン」

学習言語は、生活言語と比べると、手話表現が難しい。例えば、「作る、製作、生産、産業」は同じ手話になるが、口話を併用しない手話を用いる場合、話者がどの日本語単語を用いたかの判断は難しい。

聴覚障害学生を対象として「手話と口話を併用した話の読み取り調査」を行ったところ、口形情報を最も強く希望する学生は、音声情報や手話情報を強く希望する他の学生と比べて、日本語原文を正確に受信する度合いが高かった。また、幼児期に現在もキューサインを使用する聾学校に在籍した 3 名は、他の 21 名と比べて、有意に成績が高く現れた。

このことから、キューサインの使用は、幼児期の短期間であっても読話習慣や日本語で考える習慣の形成に寄与し、そのことが学習言語の獲得につながる可能性があることを報告する。（脇中起余子）

### 【指定討論の趣旨】

以上 3 名の話題提供を受け、長年聴覚障害幼児教育に取り組んでこられた元筑波大学の松本氏からは、幼児教育経験を踏まえて、日本語獲得における幼児期の音韻獲得の重要性という観点から話題提供に対し論点整理を行っていただき、議論を深めていただく。

また、七年前に発足した「キューサイン研究会」会長である筑波大学の原島氏には、オージオロジストとして人工内耳や補聴器の限界を踏まえ、話題提供に対し論点整理を行っていただき議論を深めていただく。

そして、我が国のキューサインの現状や学習言語獲得のための意義、今後について討論を行い、これまでの討論に基づき、早期導入段階における指導方法と課題、および幼児期と学童期以降のそれぞれにおける指導の利点と課題を整理する。さらに、キューサインの使用と聴覚活用、発音、読話習慣、音韻意識の発達、日本語の獲得との関連、さらには、口形記号の使用と音韻意識の発達、文字・書き言葉の習得との関連の問題の整理につなげたい。

(WAKINAKA Kiyoko, CHONAN Hirohito,  
FUKUSHIMA Kunihiro, MATSUMOTO Sueo,  
HARASHIMA Tsuneo)